

2020年5月3日 聖餐式説教

誕生したばかりの教会の様子は、使徒言行録に詳しく書かれております。本日の使徒書の箇所は、執事の誕生と、最初に任命された執事の一人ステパノが殉教した場面が選ばれておりました。私達の教会のなかで必要不可欠な存在として守られている聖職、すなわち主教・司祭・執事の役割、またその職に召される人が増し加えられるように祈る務めが示されております。

生まれたばかりの教会では、教会に連なる人々の食事の世話をするのが大切な務めでした。使徒言行録によれば、「信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。そして、毎日ひたすら心をつつにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである」とありますように、人々は自分のもの、自分だけのものは何もありませんでした。それらはすべて主なる神のものであり、すべての人のものだったのです。そして人々の必要に応じて分配するのが、教会の聖職の大切な役割だったのです。

しかし、教会に集う人々が増えてくるに連れて、だんだんその役割も難しくなってきました。「そのころ、弟子の数が増えてきて、ギリシア語を話すユダヤ人から、ヘブライ語を話すユダヤ人に対して苦情が出た。それは、日々の分配のことで、仲間のやもめたちが軽んじられていたからである」と使徒言行録に書かれている通りです。人間が行うことですから、完全というわけにはいきません。しかし食事は大切なことですので、この問題を解決しないことには人々の心は一致が保てなくなるかも知れませんでした。食べ物の恨みは怖いとはよく言ったものです。弟子たちはこの問題にかかわっていききましたが、お祈りをする余裕もなくなってしまいました。これは主イエスが示された道とは違っていると感じた弟子たちは、祈りの結果、食事のことを専門に担当する七人の人々を任命し、自分たちは祈りと御言葉の奉仕に専念することにしました。これは今日の私達の教会の主教の役割です。

彼らは按手によってその役割の後世の人々に伝えていきました。それが今日までも続いており、北関東教区の広田勝一主教さんも主イエスのお弟子さんたちと按手によってつながっているのです。すなわち主イエスはお弟子さんたち、

すなわち使徒たちに主教の役割の委ねられたのです。

そして次に食卓の世話をする人々が主教のスタッフとして選ばれました。これが今日私達の教会で言う執事です。執事は主教さんと直接つながっており、ここでは食事が十分与えられないで蔑まれている人、広い意味では、あちこちで苦しんでいる人を助け、必要な援助をして、教会の礼拝でそのことをささげる役割を持っているのです。

さらに教会が大きくなるに連れて、使徒たちは行くところ行くところで誕生する新しい教会が自立できるようになりますと、教会に集う人々の世話や御言葉の奉仕、祈りを自分に代わって行う人を任命してその役割を任せ、自分たちはそれぞれの教会を順番に巡回していくようになりました。この主教さんによって変わってその地に住み、主教によって変わって教会の務めに当たるのが、司祭です。このように教会の主教・司祭・執事の三職位は教会の発展と共に主なる神によって備えられた必要不可欠な存在だったのです。

また、司祭に任命される人は、執事の職務を経験していることが大切だとのことから、司祭は執事のなかから任命されることになっています。また新たに主教に任命される人も、司祭の職務をよく理解していることが大切ですので、私達の教会では主教は基本的に司祭のなかから選ばれます。従って司祭は司祭それだけでなく、執事であり司祭であります。主教も同様に、執事であり司祭であり、そして主教であるのです。

本日は神学校の働きのために祈る日です。神学校には様々な働きがありますが、その働きの一つは主教・司祭・執事として教会の職務に任命される志を持つ人々の教育・訓練です。教会の成長のためには、新しくその職務に召される人々が増し加えられることが必要です。教会の使命が多種多様になると共に、教会の働き人も従来の形のみではなく、多様な形が必要になります。北関東教区で教会の働き人の務めが一層御心にかないますように、そして教会の働き人が増し加えられますよう、祈りたいと思います。

教会の働き人は不可欠な存在であり、主なる神が必要な働き人を備えてくださるのを願います。本日の使徒言行録に出てまいりました最初の執事ステファノは、教会において食事の世話をすると共に説教をし、み言葉を伝えるために働きました。その結果ユダヤ人たちの反発に遭遇し、殉教することになってし

まいりました。「この罪を彼らに追わせないでください」とのステファノの祈りは、十字架にかけられた主イエスの姿を思い起こさせます。ステファノは名実ともに、主イエスの証人であり、その使命を全うしました。

横浜教区の主教でおられた野瀬秀敏主教様は、私の先輩の神学校卒業式において、「皆さんが戦死したらたくさんの方がキリストに降参します。かくあるべき皆様、本当におめでとうございます」と言われました。私はその話を聞いて、そのような覚悟をして神学校を卒業してこなかったと思いながら、自分の使命に押しつぶされそうになったのを思い出します。野瀬主教様は、生涯をかけてこの使命を全うするように勧められたのだと後日わかりました。

本日の福音書も、自分の羊を、命をかけて守り、羊のために命を捨てる羊飼いの姿を描いています。主イエスを羊飼いに例えれば、私たちは羊に例えられる、そして教会の働き人はシェパード、番犬に例えられることとなります。私たちの教会で牧師がラウンドカラーをしているのは、シェパードの役割を現しているのです。「私はよい羊飼い」というこの言葉は、教会の働き人への主なる神の強い使命を感じさせられます。新型コロナウイルスで世界中の人々の命が危険にさらされている中、またイタリアにおいては新型コロナウイルスに感染した方々に関わり、命を失った大勢の司祭たちがいます。今日は自戒を込めて、教会の働き人たちに主なる神が与えられた使命を改めて思い起こすと共に、その業を全うすることができるように祈り求めながら、この役割を共に担う同労者を主なる神が増し加えてくださるよう、教会の業がますます御心にかないますよう、祈り求めましょう。